

平成25年度

(第2/3回)

(集団研修)

地域における湿地の
生物多様性の保全と持続的利用

実施要領

平成25年5月

独立行政法人国際協力機構 (JICA)

Japan International Cooperation Agency

目 次

1. コース基本情報	1
2. コース背景・目的	1
3. 案件目標	2
4. 単元目標	2
5. 研修プログラム	2
6. 研修員参加資格要件	3
7. 研修実施体制	4
8. 研修の評価	5
9. 研修付帯プログラム	5
10. 主な宿泊場所	6
11. その他	6

参考資料

- 付表－1 研修員関連情報
- 付表－2 研修カリキュラム
- 付表－3 平成25年度日程表(案)
- 付表－4 年度別受入実績表

1. コース基本情報

(1) コース名

和文：(集団研修) 地域における湿地の生物多様性の保全と持続的利用

英文：Group Training Program on “Conservation and Sustainable Use of Biodiversity to the Wetland Ecosystems on Community Base”

(2) 受入期間

平成 25 年 5 月 21 日 (火) ～ 7 月 9 日 (火)

(3) 技術研修期間

平成 24 年 5 月 27 日 (月) ～ 7 月 8 日 (月)

(4) 定員、割当国

定 員：8 名 (受入数 7 名)

割当国：アルバニア、コスタリカ、レソト、メキシコ、中華人民共和國、
南アフリカ共和国、ジンバブエ

(個別型) マレーシア (下線は受入国)

(5) 研修類型：人材育成普及型

(6) 使用言語：英語

2. コース背景・目的

近年の世界的最重要課題である気候変動の防止に係わる水資源の管理、温室効果ガス発生
の抑制等、様々な課題において湿地の重要性が再認識されている。

途上国においては、とりわけ湿地の適正かつ持続可能な利用が地域住民の生活に直接的
に大きな役割を果たしていることがあり、湿地保全と利用の均衡を保つための活動が重要
となっている。

日本は湿地を農・漁業分野で活用しており、他国に対しても湿地保全と利用にかかる有
益な情報や技術の提供と人材の育成が期待されている。

本件は、自然資源を活用した持続可能な地域開発を可能にするために必要な、地域住民

との協働による保全活動や普及啓発・環境教育の推進、またエコツアー等の経済活動導入の手法等について、生物多様性の中核的要素の一つであり、今なお、世界的に減少、劣化が進行している湿地を題材に、日本における保全と持続可能な利用の事例を通し、その理念・技術の移転を図ることを目的としている。

3. 案件目標

途上国の中央あるいは地方レベルの湿地保全行政、生物多様性保全行政に携わる中堅行政官もしくは専門家が、地域住民の参加による湿地環境および生物多様性の保全に配慮した適正な利用に係わる活動計画を実施できるようになる。

4. 単元目標

単元目標 1：湿地の生物多様性の保全のための知識、情報および政策について説明できる。

単元目標 2：研修員の所属組織における、湿地の生物多様性の保全にかかる方針と施策について状況を分析できる。

単元目標 3：湿地環境および生物多様性モニタリングのための調査手法および適正な管理について学習し、現実的な実施案を作成できる。

単元目標 4：住民参加と普及啓発、環境教育の必要性について理解し、研修員の所属組織における実施案を作成できる。

単元目標 5：自国の湿地および生物多様性保全と適正な利用推進のための活動計画（案）を作成できる。

5. 研修プログラム

1) 「初期報告書 (Inception Report)」の作成

研修の主題にかかる研修員および所属組織の課題やそれに対する現在の組織としての対策・枠組みをまとめ、本邦でのコース開始時に発表する。

2) 「中間報告書 (Interim Report)」の作成

本邦研修終了時に「湿地および生物多様性の保全と適正な利用促進」に関する帰国後の活動計画（案）を作成し、発表する。

3) 「最終報告書 (Final Report)」の作成

本邦研修を修了し帰国した研修員は、中間計画書に書かれた活動計画（案）を基に活動計画の母国での実施状況につき、帰国後3ヶ月以内にJICAに最終報告書を提出する。

6. 研修員参加資格要件

募集要項記載条件

- ア. 湿地環境または生物多様性の保全に係わる実務者。
- イ. フィールド活動できる体力を有する者。
- ウ. 2年以上の経験を有する者。
- エ. 原則48歳以下の者。

各コース共通資格要件

- ア. 所定の手続きにより割当国政府から推薦されること。
- イ. 大学卒業あるいは同等の学力を有すること。
- ウ. TOEFL iBT 72点（CBT 200点／PBT 533点）以上に相当する英語能力を有すること。
- エ. 心身ともに健康なこと。
- オ. 軍に属していないこと。

7. 研修実施体制

本コースは、コースリーダーである新庄久志氏の助言のもと、独立行政法人国際協力機構北海道国際センター（帯広）（以下JICA帯広）が計画するコースの実施に関する業務を釧路国際ウェットランドセンター（以下KIWC）に委託し、関係諸機関の協力により実施・運営する。技術研修期間中、JICAは研修監理員を配置する。具体的業務分担は次のとおり。

(1) JICA帯広

- ア. 実施計画書作成（案件目標、単元目標、研修期間等）
- イ. 評価
- ウ. 実施予算の執行管理

エ. 募集要項および実施要領等の作成等

(2) KIWC

- ア. 日程表の調整・作成
- イ. 講師、視察先等への連絡・確認
- ウ. テキスト、資料等の手配 等

(3) コースリーダー

研修の計画、実施、評価の全般にわたる助言等

(4) 研修監理員

- ア. 関係者間の連絡調整
- イ. 通訳・翻訳等

8. 研修の評価

(1) 評価の目的

研修コースの単元目標に基づき、研修成果の測定・分析を通じてコース終了時に案件目標の達成度を確認する。また、今後の研修で改善すべき点をあげ、本コースの質的改善を図る。

(2) 評価の方法

- ア. コースリーダー等による単元目標の達成度把握
- イ. 研修員が提出する質問票による評価
- ウ. JICA による評価

(3) 評価会

研修終了時に質問票の記載事項の確認を中心とした評価会を実施する。

(4) 反省会

研修員の帰国後に、評価結果に基づき JICA 帯広、コースリーダー、KIWC 等が参加し、研修の目的・内容、プログラム構成、指導方法等について協議し、翌年度以降のコース改善に向けて対応方針を検討する。

9. 研修付帯プログラム

(1) プリーフィング

来日直後に JICA 東京国際センター（以下 JICA 東京）で実施する。JICA 業務およびコース概要説明、研修員登録、旅券・査証の有効期間の確認、支給される諸手当の説明等のほか、日常生活を送る上での諸注意を行う。

(2) ジェネラルオリエンテーション

JICA 東京で実施し、日本の社会と日本人、歴史・文化、政治・行政、経済、教育などを紹介する。

付帯プログラム日程（予定）

日 程	内 容
5 月 23 日（木）	集合プリーフィング
5 月 24 日（金）	ジェネラルオリエンテーション

10. 主な宿泊場所

東京国際センター（JICA 東京）

所在地：〒151-0066 東京都渋谷区西原 2 - 4 9 - 5

Tel (03) 3485-7051 Fax (03) 3485-7904

*なお、各研修地での宿泊先は JICA が手配する。

11. その他

(1) 修了証書

研修を修了した研修員に JICA から修了証書を授与する。

(2) 研修員の待遇

ア. 入国資格

技術研修を受けるために来日する者は研修査証を取得し、滞在中は日本国法規の適

用を受ける。

イ. 滞在費

JICA 規程に基づき研修を受けるために必要な手当が支給される。

(3) 国際理解教育

国際理解教育の支援のため、本コースに地域の小中学校や住民との相互理解のためのプログラムが一部含まれている。

科目	講義	実習	視察	討論	担当講師	講義内容
単元目標1: 湿地における生物多様性の保全に関する理念・政策について理解し、説明できる。						
日本の湿地保全行政	2			1	環境省自然環境局	日本の湿地保全行政の理念と取り組みについて学ぶ。
日本の生物多様性保全行政	2			1	環境省自然環境局	日本の生物多様性保全行政の理念と取り組みについて学ぶ。
里山を活かした地域づくり	2			1	高附彩(国連大学)	環境省による「SATOYAMAイニシアティブ」を紹介し、二次林や水田などの人為的環境における生物多様性の保全について学ぶ
絶滅のおそれのある野生生物の保全と移入種の管理	2			1	那覇自然環境事務所	島嶼(沖縄)の希少種・固有種保全の事例から、絶滅危惧種保全と外来生物管理のアプローチについて理解する。
生物多様性の保全総論	3			1	マーク・ブラジル	生物多様性保全の目的と意義、今日的課題について総合的に理解する。
単元目標2: 湿地における生物多様性の保全における自国の状況と解決すべき課題について分析できる。						
里山を活かした地域づくり			4	1	ケビン・ショート	田園地帯など人間の生活環境における生物多様性の保全と利用について、大都市近郊の里山の事例から学ぶ
マングローブ湿地林の保全と管理	1			1	那覇自然環境事務所	沖縄の都市部のラムサール湿地における、マングローブ林の保全と利用の手法について学ぶ
生物多様性の賢明な利用			2	1	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)	富士山周辺の自然探勝路を視察し、国立公園における遊歩道等の施設整備と、その活用方法について学ぶ
湿地保全と地域づくり	2			1	やんばる自然塾	マングローブ林・サンゴ礁等、亜熱帯の湿地における保全と活用の事例について紹介し、湿地を核とした地域振興について学ぶ
地域における湿地保全の取り組み	2			1	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)	釧路湿原の保全の経緯から、地域住民や自治体が湿地保全にはたす役割について学ぶ
地域を活かした湿地環境の賢明な利用		4		1	飢居どさんこ牧場	在来和種馬によるツアーを紹介し、既存産業を活用した地域づくりや環境教育、環境負荷軽減のための取り組みについて学ぶ。
地域住民による湿原の保全	2	3		1	霧多布湿原ナショナルトラスト	NPOによる湿原のトラスト運動について紹介し、地域住民主体の湿地保全活動について学ぶ
単元目標3: 生物多様性保全におけるモニタリングの重要性について理解し、湿地環境の適正管理のための具体的な方策について説明できる。						
気候変動と生物多様性保全	2			1	樋口 広芳(慶應大学大学院)	気候変動が生物多様性に与える影響について理解し、影響評価のための着目点や手法について学ぶ
生物多様性の保全と管理	1.5	1.5	3	1	生物多様性センター	生物多様性保全を把握するための調査手法、データベースの構築と公開手法を理解する。
湿地の再生修復とモニタリング		2.5		1	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター) 土佐良範(レイクサイドとうろ)	釧路湿原における河川の蛇行復元を紹介し、自然再生事業におけるモニタリングの重要性とその手法、および環境教育への応用について学ぶ
野生生物の保全と管理	1		1	1	齊藤 慶輔(猛禽類医学研究所)	猛禽類保護の事例から、絶滅危惧種の保護と国際協力について理解する。
ラムサール湿地のモニタリング			2	1	澁谷 辰生(厚岸水鳥観察館)	厚岸水鳥観察館における、遠隔カメラを用いた湿地環境のモニタリング手法について学ぶ。
ラムサール湿地の利用		2		1	曙カヌー工房 新庄久志(釧路国際ウェットランドセンター)	タンチョウ生息地の別寒辺牛湿原におけるカヌーツアーの例から、野生生物配慮のためのツアーガイドラインの必要性について学ぶ。
住民による絶滅のおそれのある野生生物の保全		2	2	1	山本 純郎	シマフクロウの保護管理の事例から、絶滅危惧種と生息地の保護における地域住民の役割について理解する。
単元目標4: 湿地・生物多様性保全と利用における地域住民参加の重要性について理解し、普及啓発、環境教育推進のための具体的な方策について説明できる。						
マングローブ林の保全と地域づくり		3		1	やんばる自然塾	マングローブ林でのエコツーリズムの事例から、地域の文化や経験を活かした湿地の利用と保全の方法について学ぶ
サンゴ礁の保全と地域づくり		4		1	やんばる自然塾	サンゴ礁でのエコツーリズムの事例から、地域の文化や経験を活かした湿地の利用と保全の方法について学ぶ
農村における水鳥との共生と水田の保全	1		2	2	呉地 正行(日本雁を保護する会) 大崎市産業政策課	湿地としての価値向上を目的とした、水田の冬期湛水の手法を紹介し、保全活動がもたらす農作物の価値向上の効果について学ぶ
自然情報施設の役割			2	1	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)	釧路市立博物館の視察を通じ、自然情報施設の役割について理解し、展示や環境教育の手法について学ぶ
地域における湿地保全の取り組み		3		1	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)	地域住民による釧路湿原保全の取り組みを紹介し、湿原保全における集水域管理の重要性について学ぶ
学校教育における湿地保全の取り組み			1.5	1	北海道立標茶高等学校、 新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)	高校で実施されている、水生植物を活用した水質浄化による釧路湿原自然再生プロジェクトについて、生徒自身が紹介する。
地域における湿原の普及啓発		3	2	2	霧多布湿原センター	自然情報地域自治体とNPOとの連携による普及啓発施設の運営と、学校と連携した環境教育活動の取り組みについて紹介する。
単元目標5: 地域住民による、地域住民のための生物多様性の保全と自然資源のワイズユースの推進に資する活動計画を立案できる。						
プログラムレビューとブリーフィング				10	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)	プログラムの終了後、研修員が学んだことや得たアイデアを発表し、復習を行うとともに、研修の成果を共有する。また、これから実施するプログラムの概要やそのねらいについて、事前に説明を行う(原則として週1回)。
研修のふりかえり(ファシリテーションミーティング)				2	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)、JICA	研修の終盤に、これまで学んだことを総括し、自国における課題や、その解決に向けて応用できる知見について討論、整理する。
自国における活動計画書の作成指導				4	新庄 久志(釧路国際ウェットランドセンター)	地域における湿地の生物多様性の保全と持続的利用について、自国における課題を解決するための具体案の作成を支援する。
合計	23.5	28	21.5	44		

平成25年度 JICA「地域における湿地の生物多様性の保全と持続的活用」コース 日程案

2013年4月26日現在

月 日	曜日	前/後	プログラム	担当	会場	宿泊地
5月21日	火	来日				東京
5月22日	水	終日	発表資料準備 (および来日予備日)			東京
5月23日	木	終日	フリーフィン			東京
5月24日	金	終日	オリエンテーション			東京
5月25日	土	休日				東京
5月26日	日	休日				東京
5月27日	月	午前	環境省表敬	OBIC・KIWC・環境省	環境省本庁舎	東京
		午後	JICAフリーフィン・カリキュラムガイダンス	OBIC・KIWC	JICA東京国際センター	
5月28日	火	終日	インセプション・レポート発表会	OBIC・KIWC・環境省	JICA東京国際センター	東京
5月29日	水	午前	日本の湿地保全行政	環境省自然環境局野生生物課	環境省本庁舎	東京
		午後	日本の生物多様性保全行政	環境省自然環境局自然環境計画課		
5月30日	木	午後	里山を活かした地域づくり	高附彩 (国連大学高等研究所)	JICA東京国際センター	東京
5月31日	金	終日	里山を活かした地域づくり	ケビン・ショート (東京情報大学)	千葉印西市	東京
6月1日	土	午前	気候変動と生物多様性保全	樋口広芳 (慶應大学大学院)	JICA東京国際センター	東京
		午後	プログラムレビュー&フリーフィン	新庄久志 (KIWC)	JICA東京国際センター	
6月2日	日	休日				東京
6月3日	月	移動: 東京→那覇				那覇
6月4日	火	午前	絶滅のおそれのある野生生物の保全 移入種の管理	那覇自然環境事務所	漫湖水鳥・湿地センター	那覇
		午後	マングローブ湿地の保全と管理	那覇自然環境事務所	漫湖水鳥・湿地センター	
6月5日	水	午前	移動: 那覇→名護			名護
		午後	湿地保全と地域づくり	(有)やんばる自然塾	東村慶佐次	
6月6日	木	終日	マングローブ林の保全と地域づくり	(有)やんばる自然塾	東村慶佐次	名護
6月7日	金	終日	サンゴ礁の保全と地域づくり	(有)やんばる自然塾	東村慶佐次	名護
6月8日	土	移動: 名護→那覇				那覇
		午後	プログラムレビュー&フリーフィン	新庄久志 (KIWC)	JICA沖縄国際センター	
6月9日	日	移動: 那覇→東京				東京
6月10日	月	休日				東京
6月11日	火	移動: 東京→富士吉田				富士吉田
6月12日	水	終日	生物多様性の賢明な利用	新庄久志 (KIWC)	富士山御中道	富士吉田
6月13日	木	終日	生物多様性保全と管理	環境省生物多様性センター	生物多様性センター	富士吉田
6月14日	金	午前	生物多様性保全と管理	環境省生物多様性センター	生物多様性センター	東京
		午後	移動: 富士吉田→東京			
6月15日	土	午前	プログラムレビュー&フリーフィン	新庄久志 (KIWC)	JICA東京国際センター	東京
6月16日	日	休日				東京
6月17日	月	移動: 東京→宮城				宮城
6月18日	火	終日	農村における水鳥との共生と水田の保全	呉地正行 (日本雁を保護する会)	蕪栗沼周辺	宮城
6月19日	水	移動: 宮城→東京				東京

付表-3

6月20日	木	移動：東京→釧路 視察：釧路市立博物館	新庄久志 (KIWC)	釧路市立博物館	釧路
6月21日	金	午前 地域における湿地保全の取り組み	新庄久志 (KIWC)	釧路市交流プラザさいわい	釧路
		午後 湿地の再生修復とモニタリング	新庄久志 (KIWC)	釧路湿原茅沼	
6月22日	土	ホームビジット・交流会 (釧路市交流プラザさいわい)			釧路
6月23日	日	休日 (インテリウムレポート作成)			釧路
6月24日	月	終日 地域を活かした湿地環境の賢明な利用	鶴居どさんこ牧場 [株]鶴居村振興公社	釧路湿原	釧路
6月25日	火	午前 釧路市表敬	KIWC	釧路市役所	釧路
		午後 学校教育における湿地保全の取り組み	北海道標茶高等学校	標茶高等学校	
6月26日	水	午前 野生生物の保護と管理	榊猛禽類医学研究所	釧路湿原野生生物保護センター	釧路
		午後 プログラムレビュー&ブリーフィング	新庄久志 (KIWC)	釧路市交流プラザさいわい	
6月27日	木	午前 移動：釧路→厚岸			厚岸
6月28日	金	終日 地域住民による湿原の普及啓発	NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト	霧多布湿原センター	厚岸
6月29日	土	終日 地域住民による湿原の保全	NPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト	霧多布湿原トラスト	厚岸
6月30日	日	午前 ラムサール湿地の利用	曙カヌー工房	別寒辺牛川	厚岸
		午後 ラムサール湿地のモニタリング	厚岸町厚岸水鳥観察館	厚岸湖	
7月1日	月	午後・夕 移動：厚岸→根室 住民による絶滅の恐れのある野生生物保全	山本純郎	初田牛鳥獣保護区	根室
7月2日	火	終日 移動：根室→釧路			釧路
7月3日	水	終日 生物多様性保全総論	マーク・ブラジル	釧路市交流プラザさいわい	釧路
7月4日	木	終日 地域における湿地保全の取り組み	新庄久志 (KIWC)	釧路湿原 (キラコタン崎)	釧路
7月5日	金	午前 プログラムレビュー&ブリーフィング	新庄久志 (KIWC)	釧路市交流プラザさいわい	
		午後 ファシリテーションミーティング	JICA	釧路市交流プラザさいわい	
7月6日	土	(インテリウムレポート作成指導)	新庄久志 (KIWC)	釧路市観光国際交流センター	釧路
7月7日	日	(インテリウムレポート作成指導)	新庄久志 (KIWC)	釧路市観光国際交流センター	釧路
7月8日	月	終日 インテリウムレポート発表会・評価会・閉講式		釧路市交流プラザさいわい	帯広
		夕 移動：釧路→帯広			
7月9日	火	帰国			

年度別受入実績表

1. 応募/選定(受入)人数

	24年度	25年度	累計
応募数	7名	7名	17名
受入数	7名 (個別型を含む)	7名 (個別型を含む)	14名

2. 研修員の出身国

○男性 ●女性

国名	24年度	25年度	累計
(アジア地域)			
中国		○	1名
フィリピン	○		1名
タイ	●		1名
ベトナム	●		1名
マレーシア	●(個別型)	●○(個別型)	3名
(アフリカ地域)			
ウガンダ	○○(個別型)		2名
(欧州地域)			
アルバニア	○(個別型)		1名
(中南米)			
メキシコ		○○○	3名
コスタリカ		●	1名
計	6カ国	4カ国	9カ国
	7名	7名	14名



独立行政法人国際協力機構 北海道国際センター（帯広）
〒080-2470 北海道帯広市西20条南6丁目1番地2
TEL：0155-35-1210 FAX：0155-35-1250
ホームページ：www.jica.go.jp/obihiro/
メール：jicaobic@jica.go.jp